

新型コロナウイルスに翻弄された一年

渡邊博之（農学研究科長）

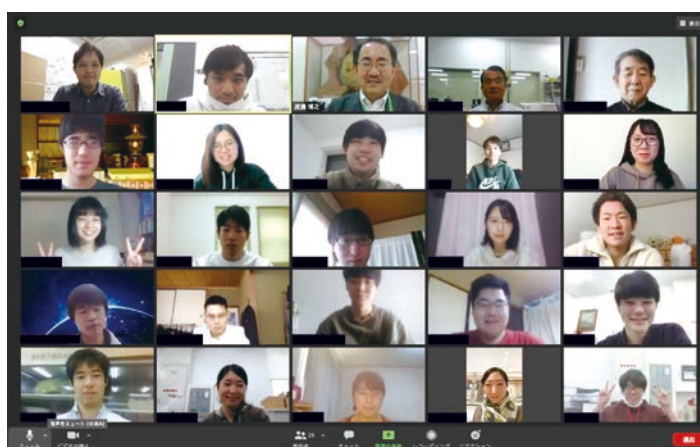
異例づくめの一年であった。2019年12月に中国武漢市で確認された新型肺炎は、またたく間に世界中に感染拡大し、2021年2月末には全世界での死者数が250万人を超えた。国内でも2020年4月には緊急事態宣言が出されたのに引き続き、2021年2月にも再度、10都府県に緊急事態宣言が出され、東京都では3月1日現在もまだその状態が続いている。未知の感染症の拡大は、対面サービスを基本とする教育現場を直撃した。2020年2月には唐突に全国の小中高校の臨時休校が政府から要請され、3月は卒業式も含め登校できない状況が続いた。大学ではさらに登校自粛が強く打ち出されて、2020年4月以降、約1年間はオンラインを基本とする授業対応が徹底されることとなったのである。

入学式もガイダンスも講義も実験実習もすべて対面で行うことができない状況が続く、教員はやむなくオンライン授業のスキルを身に付けて対応することとなった。一年前には、ZoomもTeamsも聞いたことのない教員が大部分だったのが、いまや授業に必須のアイテムとなった。多くの教員が試行錯誤でオンライン授業を進め、失敗を重ねながら何とか一年を過ごした感がある。オンライン授業については、私自身、最初は驚きの連続であった。教室で顔を合わせて出席を取り、授業を始めるのが当たりまえの教育現場で、キャンパスに学生が全くいない状態で4月から授業カリキュラムが進んでいることに衝撃を覚えた。「なるほど、こういうやり方があったんだ」、「学生はキャンパスに来なくても大丈夫なんだ」、「やろうと思えば、オンラインでここまでできるんだ」という驚きである。社会全体も意識改革を求められた。入社することで仕事が始まる勤務スタイルが、逆に、在宅勤務、オンライン業務が推奨されるようになった。ただ、オンライン授業を進めるうちに、徐々にオンラインではできないことも理解した。やはり「対面でしかできないこともこれだけある」という思いに変化したのである。オンライン授業により通学時間も省け、比較的短い時間で効率的に要点を伝えることができる反面、学生のように感じ取りながらフレキシブルに展開する授業は難しい。やはり、オンラインで学生のように理解度を的確にキャッチすることは、ほとんど不可能である。さらに、実験、実習など、体験型授業については、学生に伝えられる内容が大きく減少してしまうことも学んだ。

2021年2月より医療従事者から新型コロナウイルスのワクチン接種が始まった。世界は確実にアフターコロナの状況に移行する。ただ、2020年に起こったパンデミックの体験から得られた教訓は多い。教育現場においても同じである。確かに、オンラインではできないことも多いことを確認できた。しかし、オンラインツールという強力な武器を装備できたのは今回の大きな収穫である。場合によっては、学生が教室に来なくても授業はできる。要点をまとめて伝えるだけに限れば、オンライン授業はたいへん効率的な方法であり、アフターコロナの時代であっても臨機応変に活用できる。何よりも、これまで画一的に考えてきた教室での授業展開だけでなく、オンライン授業というオルタナティブを採用しようという考えは、とても重要だと思う。どういう方法が効率的で、教育効果が高いかという観点から取捨選択できるのである。

完全にアフターコロナに移る前に、しばらくはウィズコロナの状況が続く。教育現場の意識としては、授業スタイルを画一的に考えず、必要に応じていつでもオンラインを導入するというフレキシブルさをいつも念頭におくことは重要である。2020年のコロナ体験をもとに意識を変え、授業の方法や授業スタイルにこだわらず、より効率的な学修カリキュラムをめざして、ウィズコロナ、アフターコロナの時代を乗り切りたいものである。

2021年3月1日



オンライン授業！

